

アメリカ・インディアンの「公的記憶」の創造
—国立アメリカ・インディアン博物館の展示分析を中心に—

18ar162 山崎那津子

● 研究旅行要旨

2月6日～16日まで、アメリカにおけるアメリカ・インディアンの公的記憶について研究を行った。ワシントンDCとニューヨークにある国立アメリカ・インディアン博物館と、国立アフリカンアメリカン歴史文化博物館を研究対象とした。博物館の展示分析を行うことでアメリカ・インディアンにおける公的記憶を明らかにすることと、その裏に隠れる政治的意図について調査を行った。さらに、同じマイノリティであり、かつ支配された過去があるアメリカン・アフリカンとの比較を行った。これにより、現在のアメリカが抱えるマイノリティへ対する考え方、共通点や相違点を浮かび上がらせることでより研究内容を掘り下げていくこととした。

2016年度 国際文化学部 研究旅行奨励制度 報告書

アメリカ・インディアンの「公的記憶」の創造
—アメリカ・インディアン博物館の展示分析を中心に—

18ar162 山崎那津子

〈目的地〉

アメリカ合衆国（ワシントン DC・ニューヨーク）

■ 研究旅行の目的

15 世紀末にヨーロッパ世界がアメリカ大陸を発見して以降、「インディアン」と名付けられた先住民は、ヨーロッパ系植民者から収奪・排除・虐殺を受けた。19 世紀にはアメリカ合衆国側でインディアン政策への基本方針が変更された為、インディアンはアメリカ合衆国への「同化」・「市民化」を押し付けられ、文化的抹殺と引き換えに 1924 年、合衆国市民として認められた。その後、時代状況の変化に伴って、インディアン政策に「歴史賠償」・「文化尊重」という発想が加わり、今日、アメリカはインディアンに対して経済的支援に重点を置いた様々な部族優遇政策を行っている。

このようにアメリカ・インディアンに対するアメリカ合衆国政府の対応は変化していったが、実際のインディアン諸族の生活は必ずしもその変化が反映されていない。「最も悲惨なマイノリティ」といわれるアメリカ・インディアンの居留地での生活は、薬物中毒者数、アルコール依存患者数、高校中退率、失業率、疾病率などどれも最悪の水準で、かつて奴隷であった黒人よりも生活水準の低い劣悪な環境の中で生活をしている。あらゆる経済的支援が行われても、近年またアメリカ・インディアンに対する差別感情も高まっており、国の取り組みは彼らの根本的解決にはつながっていない。

本研究では、こうしたアメリカ・インディアンの歴史と現状を踏まえたうえで、現在の公的記憶の問題に焦点を当てた。経済的支援を主においても現状が改善されない理由として、インディアンという集団的アイデンティティへの消極的な姿勢が指摘される。自尊心の喪失はインディアンの社会生活や経済活動において大きな障害となっている。また、インディアンを巡る公的記憶の問題は、アメリカ合衆国の理念と歴史の関係性を問う上で重要な問題である。人々はどのような意識形成をされたのかに注目し、そこから見える政治的な意図を考察することが、アメリカ・インディアン問題を考える方法として有効である。以上のことから、本研究では 2004 年開館の国立アメリカ・インディアン博物館の展示分析を主な作業としつつ、インディアン側とアメリカ合衆国側の双方の間に作られた「公的記憶」とはどのようなものなのかについて検討した。

■ 期待される成果

本研究旅行を通じて期待される成果として、第一に、現在のアメリカ合衆国におけるアメリカ・インディアンの公的記憶の具体像を明らかにすることが挙げられる。例えば今日のアメリカ映画で映し出されるインディアンの私的な姿は、無垢な彼らに起きた残酷な植民者による悲劇の姿や、西部劇での野蛮で卑劣な姿など混沌としている。本研究では、国立アメリカ・インディアン博物館の展示内容の分析を通じて、公的なインディアン像を浮き彫りにするとともに、その政治的な意味を考察していく。

第二に、同様に植民者から抑圧された歴史を持つアメリカ黒人との比較を通じて、アメリ

カ・インディアンをめぐる公的記憶の特徴を明らかにすることが挙げられる。ワシントン DC のモールには、去年開館された国立アフリカン・アメリカン歴史文化博物館もある。この二館の展示内容を比較することでアメリカ政府のマイノリティへの「公的記憶」をめぐる多様性について考えていく。

〈日程〉

	滞在地	行動・調査内容
2月6日	移動日	福岡→東京→ワシントン DC
2月7日	ワシントン DC	アメリカ・インディアン博物館 (National Museum of the American Indian)
2月8日	ワシントン DC	アメリカ・インディアン博物館
2月9日	ワシントン DC	議会図書館 (Library of Congress)
2月10日	移動日	ワシントン DC→ニューヨーク
2月11日	ニューヨーク	ジョージ・グスタフ・ヘイ・センター所属アメリカ・インディアン博物館(National Museum of the American Indian)
2月12日	ニューヨーク	ジョージ・グスタフ・ヘイ・センター所属 アメリカ・インディアン博物館
2月13日	移動日	ニューヨーク→ワシントン DC
2月14日	ワシントン DC	アフリカン・アメリカン歴史文化博物館 (National Museum of African American History and Culture)
2月15日	ワシントン DC	議会図書館
2月16日	移動日	ワシントン DC→東京
2月17日	移動日	東京→福岡

■ 研究報告書

◎アメリカ・インディアン博物館 (ワシントン DC)

—概要—

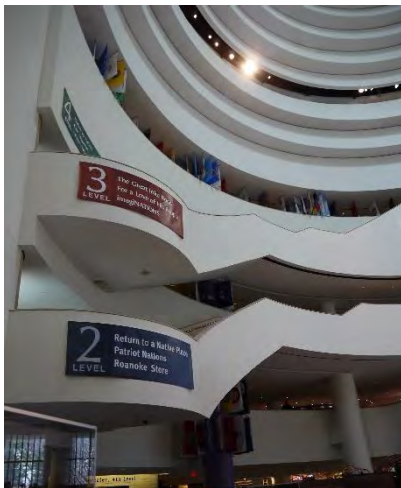
最寄り駅の Federal Center SW Station から徒歩 5 分ほどの場所にアメリカ・インディアン博物館が立地している。休館日は 12 月 25 日のみで年中無休、午前 10 時から午後 5 時 30 分まで開館。館内には、英語だけでなく様々な言語に訳されたパンフレットが用意しており、言葉の障害を感じることなくスムーズに行動することができる。

ここは 1989 年にアメリカ合衆国議会法を経て建設が開始された。しかし建設するための十分な資金が調達されなかった。そのため、1991 年 1 月、スミソニアン協会は前代未聞の募金の呼びかけを行った。新聞各社に次のような広告を掲載した。「コロンブスを発見した人たちから、新しい博物館についてのお知らせ。一般市民の皆さんと、『その他 (のお金持ち)』の皆さんに、20 ドルから 1,000 ドルまで、寄付金を求めます。」(Michael Kilian, “Chicagotribune”, 1991, 1, 16.) という内容である。



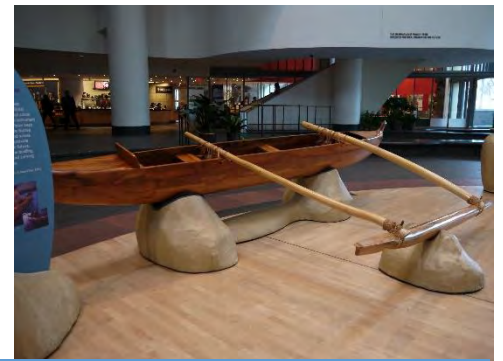
アメリカ・インディアン博物館 撮影者：山崎那津子、2/7

多数の有名著名人から寄付を受け、なんとか建設費を獲得し 2004



半円を描く構造で吹き抜けになっている
撮影者：山崎那津子、2/7

年 9 月 21 日に無事開館した。この博物館のような、アメリカ・インディアンにだけ焦点を当てた博物館は、アメリカ合衆国において初めてとなった。大西部の自然をイメージした建物となっており、先住民を扱った博物館としては最大規模である。コレクションも多岐にわた



エントランスに展示されてあるボートの 1 つ
撮影者：山崎那津子、2/7

り、約 6500 点が展示されている。入館すると、1 階から 4 階までが吹き抜けの作りになっており、1 階にはハワイのカヌーや南米インディオのボートが展示され、見る人にポトマック川を連想させる。



各階のインフォメーション 撮影者：山崎那津子、2/7

主な施設として、1階には、ウェルカムデスク（案内所）、ポトマック・アトリウム、カフェ、2階には『チェサピークのアルゴンキン族』展、ロアノーク・ミュージアムショップ、シアラスカ・ギャラリー、3階には『ケイ・ウォーキングスティック—アメリカ人アーティスト』展、『大インカ道』展、そして4階にはシアター、『国家とネーション』展、『私たちの世界』展という内容で構成されている。

－展示分析－

展示分析を始める前に、前提として次のことを理解しておかなければならない。2000年度の国勢調査によると、アメリカ先住民の人口はたったの 247 万 5956 人で、全アメリカ国民の約 0.9%である。先住民が生活する 300 以上もある居留地の総面積は、アメリカ全土のわずか 3%未満であり、白人がアメリカ大陸へ上陸する前までは、人口と国土の 100%が先住民のものであったと考えると、彼らが経験してきた迫害や略奪の歴史がいかに過酷であったか思い知らされる¹。

さらに彼らの住む地域は、居留地や都市部の辺境に囲われており、アメリカ社会のなかで活躍しにくい構図の中に追いやられている。実際、アメリカ合衆国で最も長い歴史を持ち、アメリカで生活してきた彼らでありながら、近年増加傾向にあるヒスパニック系移民や、奴隷として連れてこられた黒人よりも高い割合で貧困層に属している²。2003年、ナショナルモールに 16 番目の博物館として、今回私が訪問したアメリカ・インディアン博物館が仲間入りした。アメリカ国民それぞれが抱くアメリカ・インディアンのイメージ像は、本来であれば多様なはずである。このように、1つの選択された解釈に対し多様な歴史的解釈を公的記憶と呼ぶ³。しかしアメリカ・インディアン博物館は展示制作の過程において、ある歴史解釈が選択されている。その選ばれたアメリカ・インディアン像の解釈を公的記憶と称して展示をしている。つまり、展示分析を行うことは、アメリカ・インディアン博物館の公的記憶がどのような意図のもとで創造されているのかを実際に明らかにすることができるかと仮定できる。

入館してすぐ来場者数の少なさに驚いた。2/7、8、9に当館へ調査を行ったが、いずれの日も

¹鎌田遵、『ネイティブ・アメリカン—先住民社会の現在—』,岩波新書,2009年 p4

²鎌田遵、『ネイティブ・アメリカン—先住民社会の現在—』,岩波新書,2009年 p5

³田川泉『公的記憶をめぐる博物館の政治性 アメリカ・ハートランドの民族誌』,明石書店,2005年 p8

閑散としていた。2003年に開館されたスミソニアン協会（Smithsonian Institution）の中で、16番目に建てられた新しい博物館でありながら、人々の関心の薄さが来場者数の少なさに表れていた。

館内は、あらゆるところで収蔵品を展示しながら、アメリカ・インディアンが送っていた暮らしの具体的な様子や、インディアンがどんどんアメリカ社会へ溶け込んでいく様子、映像を使ったインディアンに言い伝えられている神話や、彼らの自然や宇宙に対する崇拝が紹介されている。どれもきれいであり、尊く感じられた。

しかし、共感できるものというよりはすべて別世界のものであり、アメリカ・インディアンと自分たちは違う人間という印象を受けた。アメリカ社会に溶け込んでいくアメリカ・インディアンは、彼らの文化を維持したまま溶け込んだわけではない。例えば車を使ったインディアン



博覧会パレードの写真（右図）から **パレードに車で参加するアメリカ・インディアン 撮影者：山崎那津子、2/7** わかるように、アメリカ・インディアンがアメリカの車という文化を受け入れ、同化を強いられている様子がわかる。

さらに、博物館は〈自然〉というツールを使ってアメリカ・インディアンの姿を観る者に示していた。例えば、広大な土地の中でこちらを見つめる無垢な先住民の写真や、川で魚釣りをして



崖を渡るための綱でできた橋 撮影者：山崎那津子、2/7

いる男たちといったようなものだ。見ている者がとっつきやすい内容となっており、とっつきやすい内容というのは決して共感できる内容ということではなく、ひとつひとつがキレイなのである。思わず目をそむけなくなる瞬間は一度もなかった。一部で展示されていた、彼らが経験してきた迫害や略奪の歴史は、単純に「悲しい」「かわいそう」といった感情だけでおさまってしまった。

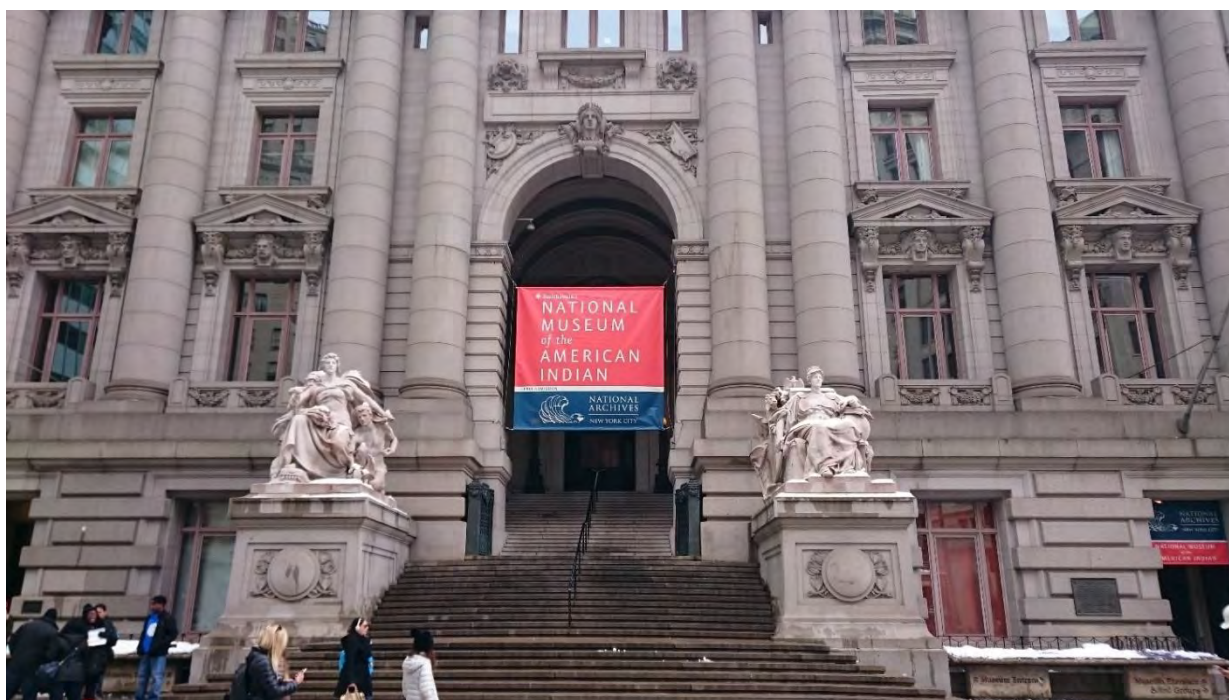
加えて、この博物館について書かれた資料⁴によると「所蔵しているコレクションを見せているだけで、テーマ性に乏しいという印象を受けた。百科事典を数冊分ひっくり返したようで、取りとめがないように感

⁴鎌田遵『ネイティブ・アメリカン—先住民社会の現在—』,岩波新書,2009年 p148

じられた」という意見もある。

以上のことから、国立アメリカ・インディアン博物館は、「アメリカ・インディアンは自然を愛し、自然と共に生きてきた。しかし当時受けた侵略によって悲しい歴史を歩んだが、時間が経ちアメリカ人と同化をはたしていったことで、現在はアメリカ社会の中で共存している。」と認識させられた。

◎ジョージ・グスタフ・ヘイ・センター所属アメリカ・インディアン博物館 (ニューヨーク)



ジョージ・グスタフ・ヘイ・センター所属アメリカ・インディアン博物館 撮影者：山崎那津子、2/11

ー概要ー

地下鉄1番線で South Ferry へ行き、そこから徒歩2分ほどのところにジョージ・グスタフ・ヘイ・センター所属アメリカ・インディアン博物館が立地している。地下1階、地上1階、2階の設計になっており、歴史が吹き込まれた建築物でもある。この博物館も、スミソニアン協会 (Smithsonian Institute) の一部である。アメリカ・インディアンが生活において利用していたモノや、アクセサリ、さらに置物といったような展示物によって民族ごとの姿が展開されていた。また、やはりアメリカ・インディアンの生活には自然が切っても切れない存在であることを示し、度々アメリカ・インディアンによって表現される鳥や、カエルなどが紹介されていた。しかし、残念なことに 2/10・2/11 にこの博物館へ調査を行ったが、ちょうどこの両日が、早めの閉館と、ファッションショーが行われる日程と重なっており、1階のみの展示に限定された調査となった。

—展示分析—

この博物館では、伝統品やアクセサリー、当時着ていたもの、また女性をかたどった人形や、動物をかたどった土器などが民族ごとに展示されていた。

さらに、民族ごとに展示される際に、どこの地域の民族かと明確に理解できるように地図も用意されていたおかげで、地理的要因から見える民族ごとの収蔵品の違いなども理解できるようになっている。

特にこの展示物を観たからといって、インディアンに対して抱いているイメージが、がらりと変わるような内容ではなかった。



アメリカ・インディアンの伝統的な装飾品 撮影者：山崎那津子、2/11



それぞれの地域で着られていた衣服 撮影者：山崎那津子、2/11

◎国立アフリカン・アメリカン歴史文化博物館 (ワシントン DC)



—概要—

アフリカン・アメリカン歴史文化博物館 撮影者：山崎那津子、2/14

2016年9月24日、スミソニアン協会によって、もっとも新しいアフリカン・アメリカン歴史文化博物館が開館した。アメリカ黒人社会の歴史や文化に関する国立博物館としてはアメリカ合衆国初となる。最寄り駅は Federal Triangle 駅で、ここから徒歩6分ほどで到着する。

最も新しい博物館ということもあってか、開館時間よりも前に到着したにも関わらず長い列ができていた。

—展示分析—

地上階・地下階でがらりと雰囲気が異なっていた。地上階は、受付のある1階を含めて4階で構成されている。派手で、明るく、栄光の歴史や、偉人に特化した展示となっていた。



各スポーツ界で優秀な黒人選手が展示されている様子
撮影者：山崎那津子、2/14



勲章や黒人の歴史において活躍した人々
 撮影者：山崎那津子、2/14

スポーツ選手、アーティスト、ほかにも黒人が絡む歴史の中で活躍した者が数多く展示されており、アフリカン・アメリカンのパワーや、影響力、魅力に圧倒された。



カラフルで派手にカルチャーが紹介されている様子 撮影者：山崎那津子、2/14



体験式のフロア 撮影者：山崎那津子、2/14

また、現代に浸透しているアフリカン・アメリカンの文化を1フロアまるまるすべて使って実際に体験できる、体験式の展示方法も組み込まれていた。



画面を見ながらダンスをする子供たち 撮影者：山崎那津子、2/14



当時の表彰台を表した3人の銅像 撮影者：山崎那津子、2/14

地上階の展示分析を進めていると、明るく派手な代わりに、悲しい事実が載せられていないことが見受けられた。顕著に表れていたのは、1968年のメキシコオリンピックで起きたブラックパワー・サリュート（アメリカ公民権運動で黒人が拳を高く掲げ黒人差別に抗議する示威行為）の展示だ。展示説明には、要約すると黒人の貧困を象徴するため、シューズを履かず黒いソックスを履き、黒人のプライドを象徴する黒いスカーフを首に巻き、白人至上主義団体によるリンチを受けた人々を祈念するロザリオを身につけ、ブラックパワーを知らしめたと書かれていた。続けて、これを英雄の行為とし、称賛していた。しかし、この出来事には続きがあり、示威行為を行ったということでトミー・スミス（中央）ジョン・カーロス（右）はアメリカスポーツ界から追放され、輝かしい成績を残したオーストラリアの選手ピーター・ノーマン（左）

も歴史から抹消される扱いを受けた。彼らはメディアからの非難や中傷、さらには脅迫文など数々の扱いを受けたにも関わらず、彼らが行った勇気ある行動のみをピックアップし、不当な扱いについては示されていないかった。

つぎに地下階について分析していく。地下へはエレベーターを使って降りていくが、壁に年号が書かれており、着いた階には1400年と書かれ、まるでタイムスリップしたような感覚を味わう。地下は地上と打って変わり、とても暗く、いたたまれない気持ちに何度もさせられた。映像を使った展示が数多くあり、差別にあった黒人たちの痛みや、苦しみが生々しく伝わってくる。

歩き進めていくと、だんだん現代に近づいていき、モンゴメリーバスボイコット事件や、ワシントン大行進、ナッシュビル座り込みといった公民権運動について展示されていた。ナッシュビ



クークラックスクラン (kkk) のマスクの展示
撮影者：山崎那津子、2/14

ル座り込みに関しては、実際のカウンターを再現したものが展示されており、そこに座って映像を見ることができた。他にも、ブラックパワーについて展示されており、多くの苦難を自らの力（ブラックパワー）で何度も乗り越えてきた黒人たちの歴史を再確認させられた。

最後出口付近で流されていたビデオで、オバマ氏の演説の様子や、黒人と白人が手を取り合って生きていくアメリカ社会の様子が流されていた。そして、道を進むとドアがあり、そこを抜けると現在の空間に戻ってくる構造になっている。

地上と地下ではっきり明暗が分かれているこの博物館は、地上階で戦争について触れるところがあっても、その戦争の概要と共に、なぜ戦うのかといったアフリカン・アメリカンの心に注目されていた。そのため、戦争の悲惨



ナッシュビル座り込みを再現したカウンター 撮影者：山崎那津子、2/14

さというよりも、戦争に加わる彼らの本音や真意が述べられていた。また、活躍した人々がキラキラと派手な照明や設備の中で紹介されたり、アフリカン・アメリカンがもたらした文化がダイナミックに展示されていた。一方で地下は暗く、目を覆いたくなるような歴史の事実と何度も向き合わされた。しかし歩き進めていくと、公民権運動が活発化し、権利を獲得、という展示の流れがあり、そして出口へ案内され現在へ進む。

アフリカン・アメリカン歴史文化博物館の展示分析を終えて、アフリカン・アメリカンが抱える問題は過去の事柄であり、彼らは彼ら自身の手によっていまの地位を獲得していったというように捉えられた。しかし現在でも、差別や逆差別など様々な課題が依然として残っている。そのことについて多く語られていないことに驚かされた。



Black Power の活動について書かれているパネル 撮影者：山崎那津子、2/14

◇ マイノリティを取り扱った博物館から見えた共通点

このように今回この3つの博物館を調査し、大きな共通点が浮かび上がった。それは、現在抱えている問題についてあまりよく触れられていないことである。

アメリカ・インディアン博物館において、どこを探しても現在とアメリカ・インディアンの間にある解決しなければならない課題について展示されていなかった。現在の彼らの暮らしぶり、また過去にあった悲劇が今どのようにして影響が出ているのかなど、アメリカ・インディアンを考える上で必要なことが抜けていた。つまり、アメリカが抱える現在のアメリカ・インディアンの課題について皆無であったのだ。アフリカン・アメリカン歴史文化博物館においても、過去の話として悲しい歴史や、それに対する彼らの戦い、そして彼らが現在のアメリカ社会に対しどのように影響しているのか、ということに注目をされていた。現在問題視されている、人種差別については積極的に言及されていなかった。

◇ マイノリティを取り扱った博物館から見えた相違点

まず、入場した瞬間に感じられたのは、入場者数の違いである。アフリカン・アメリカン歴史博物館は設立されて間もないこともあってか、開館前から行列ができていた。もちろん、館内も賑わっており、比較的黒人の方が多く見受けられた。さらに、展示物の量の違いは明らかで、アフリカン・アメリカンが支配されてきた歴史や、それに打ち勝つために起こしてきた運動、また、目を覆いたくなるような事実も躊躇することなく展示されており、観る者の心を何度も揺さぶった。また、年代を区切って展示されており、階を上るごとに現代へ近づく展示方法をとっていたため、現代につながる流れをよく理解することができた。

一方最初に訪れたワシントン DCにあるアメリカ・インディアン博物館においては、入場者数はかなり少なく閑散としていた。展示物においても、衣装や土器といったような生活感あふれるものは数多く展示されていたが、支配された歴史を物語るようなものの展示物は少なかった。アフリカン・アメリカン歴史博物館は地下4階まですべて歴史を展示していたことに対し、アメリカン歴史博物館は4階の右側のみの展示であった。ジェロニモについてや、トーテムポールの展示は一切なく、彼らの暮らしに重点が置かれており、その現代の私たちとはかけ離れた暮らしぶりに、思わず異世界の人のように感じられた。

◇ 終わりに

アメリカ・インディアンの博物館において、彼らの暮らしぶりは私たちに身近な自然を使って語り掛けてきた。彼ら独特の、私たちがすぐに理解しにくいものはあまりなく、アメリカ・インディアンと私たちが共通する自然をツールとしていた。そのため、アメリカ・インディアンの文化に対して違和感を覚えることなく、彼らの文化はきれいで美しい文化という印象を受けた。また、アメリカ・インディアンについて、昔の迫害の歴史については少し展示されていたが、現在抱える問題については触れられていなかった。そのため、彼らを差別する気持ちは

もちろん生まれることはなかったが、彼らのことを考えなければならないという強い気持ちは生まれなかった。これは、大きな課題だと考える。

また、資料⁵によると、スミソニアン国立自然史博物館の文化部門においてアメリカ・インディアン文化が展示されている。国立アメリカ史博物館があるにも関わらずアメリカ・インディアン文化に関しては自然史博物館に展示されているのだ。加えて、インディアナ州立博物館でも自然史展示室でアメリカ・インディアンが展示されている。さらに、その自然史展示室の最後の出口の上の壁にアメリカ・インディアンの首長の言葉として「自然は一度壊してしまったら元には戻らないものだ」という教訓を引用したものが書かれている。なぜここで、アメリカ・インディアンの言葉として展示されたのか、これはまるで、奪われたアメリカ・インディアン文化や歴史はもう元には戻らないと暗に意味しているようにも感じられる。

今回アメリカ・インディアン博物館において自然を使った展示が多くされていたのは、もちろん自然をツールとすることで、我々とインディアンを結び付けやすくしたとも考えられるが、一番大きな理由はそこではなく、次のような意図が隠されていると私は考える。アメリカ・インディアンの文化はたしかに壊されてしまい元には戻らないが、現在はアメリカ社会に溶け込んでいる。壊れた彼らの文化とは過去のものであり、現在はアメリカ人として同化しているというメッセージだ。

アメリカ・インディアンがアメリカで生活するには数多くの深刻な課題がある。そのことを忘れずに、そして、彼らの素晴らしい文化を残していくことにもっと力を注ぐべきであり、まだまだ足りないと感じた。

今回の研究旅行を通じて、博物館をすべてみるのは予想外に大変なことだと痛感した。開館から閉館までずっと歩きまわる必要があり、体力的にとてもきつく、もっと余裕を持った計画が必要であったと感じた。また、不定期に行われるイベントによってジョージ・グスタフ・ヘイ・センター所属アメリカ・インディアン博物館をほぼ見るができなかった。情報収集不足であったと反省した。

実際に博物館へ足を運び肌で、文章ではとらえられなかった、重々しさや、躍動感を感じることができた。今後のゼミでは、今回見つかった博物館におけるアメリカ・インディアンの現状の情報の少なさを課題とし、なぜそのような展示をしているのかももっと研究していきたい。

■ 参考文献一覧

田川泉『公的記憶をめぐる博物館の政治性 アメリカ・ハートランドの民族誌』,明石書店,2005年

鎌田遵『ネイティブ・アメリカン—先住民社会の現在—』,岩波新書,2009年

青木保『異文化理解』,岩波新書,2001年

杉山宏人『地球の歩き方 ワシントン DC』,ダイヤモンド社,2014年

⁵田川泉『公的記憶をめぐる博物館の政治性 アメリカ・ハートランドの民族誌』,明石書店,2005年 p22